ドバイ日本人学校　No. 17

学校だより　熱　砂

＜発　行＞
令和２年 11 月１日
発行責任者：校　長
和田　政男

かつての日常が少し戻ってきました･･･分散登校の終了

２学期が始まり，ほぼ２カ月が経過いたしました。この間，１週間交代の分散登校により，コロナ禍における新しい学校生活にも馴れてきたところです。また，学校では早くかつての日常を取り戻したいと，登校を希望する全ての児童・生徒の受け入れ体制を検討しておりました。10 月初めには，新しい計画を KHDA に提出し，全児童・生徒が登校できるように申請いたしましたが，このほど，その許可がおりました。

一方で，UAE における新型コロナウィルスの新規感染者数も増え続けており，これまで以上の緊張感をもって感染防止対策を進めなければならないと考えております。

ご家庭においても，子どもたちの体調の変化を注意深く見守り，本人はもちろん，ご家族の体調等にも心配がある場合には，登校を控え，自宅からオンラインで授業に参加するようなご配慮をお願いいたします。オンラインでの授業参加も「出席」と認めたいと考えております。（ただし，体調が悪い場合，決して無理はさせず休ませてください）

各プロジェクトはどのように推進されているか

コロナの影響を受けて，昨年度末から計画したことを実践に移すのに，大変苦労しておりますが，今年度，多くの課題に対するプロジェクトを立ち上げ，推進しております。

○　外国語教育プロジェクト

日本の教育課程にある「英語」「外国語活動」と本校独自の「EC」を統合し，また２学年を一緒にして習熟度別のクラス編成にし，テキストもイギリスから取り寄せて行うという改善を行いました。実質２学期からの実践になりましたが，課題を修正しながらより良いものにしていきたいと考えています。

○　総合的な学習の時間（ミナレ）プロジェクト

昨年まで児童・生徒個人がテーマ設定し，個々の取組みに近かったミナレですが，今年度から学級毎にテーマを決め，テーマに基づく多方面からのアプローチをすることで，「協働学習」や「思考の練り上げ」を狙えるような，本来の総合的な学習の時間の良さを体験できる時間をめざしています。

○　校内特別支援委員会の立ち上げ

学校運営理事会からも委員を招き，支援の必要な児童・生徒に対する校内の支援体制構築について話し合っています。次年度より，個別の支援が可能となる「特別支援教室」を設置する方向で議論をしております。

○　KHDA 対策委員会（全職員による取り組み）

毎年行われている KHDA インスペクションとそのレポートに基づき，本校の教育課程の編成に，KHDA フレームワークの考え方を取り入れることを検討しております。年間を通して取り組みのエビデンスを蓄積することで，今年のインスペクションに備えることができるものと期待しております。（もちろん評価のアップも期待しています）

○　その他にも

４０周年記念事業対応，事務部の強化，校務主任の新設など，外から見えにくい改善も行っております。

分散登校を終了し，かつての学校生活が戻りつつある今，昨年度末から今年度初めにかけて計画したことが上手く回るよう，気持ちを新たにしているところです。

65 年前の農村文化･･･日本の養蚕について

本校が参加しているシルクプロジェクトについて新聞報道で知った郷里の友人が，ある「随筆」を送ってくれました。この随筆の筆者は，私の郷里の大先輩で（私よりも 10 歳以上年上の元小学校長），地域の退職校長会の会長をしておりましたので，私もよく存じ上げている方です。

私は農家の出ではないので，よくわからなかったのですが，この随筆を読んで，私の出身市の近在農家でも蚕と深く関わった農村文化があったことを知り，また郷里の風景や私の子ども時分の農村文化が目に浮かぶようで，心に染み込むような感慨を覚えました。

本校でも蚕を家に持ち帰り，親と一緒に餌やりに励み，見事な繭をたくさんとって学校に持ってきた児童が多数おります。是非，お家の方と一緒に読んで欲しいと思い，次ページに掲載いたします。

なお，本校の子どもたちが収穫した繭は，11/4，長野県の製糸工場で絹糸になります。G3 の児童はオンラインで見学する予定です。

おこ（蚕）さま

佐藤　瑞夫

私が日頃散歩道にしている北上川の堤防道の側に，樹齢が百数十年を優に超えると思われる桑の大木が鬱蒼と茂っている。普段，桑の木はそれほど大きく育つ樹木ではないと思っていたが，今は養蚕にも使われなくなり，切られることも無くなったためだろうか，枝は伸び放題伸びて垂れ下がり，こんもりとひと山を形成している。

今から五十年ほども昔は，私の近所の畑の至る処に桑の木が植えてあった。七月頃，その桑の木に黒紫色をした実がつく。甘酸っぱい味がする黒の実（かご）は，腹を空かした餓鬼どもの無くてはならないおやつ代わりになっていた。桑の木に登っては，口の周りを紫色に汚しながら貪り食ったものである。その度に刈り取り間近の麦畑を踏み荒らすので，親たちからしこたま叱られたことも記憶に新しい。

歴史を紐解けば，明治維新の後に政府がとった富国強兵策の一環として，生糸の生産が全国的に広まった。桑の葉が早く出る南の関東地方では，春，夏，秋の年三回ほど桑を育て，繭を売っていたようであるが，葉の出が遅いこの辺り（紹介者注：岩手県南地方），田植えの後の春蚕（はるこ）を育て，その繭を売って現金収入を得ていた。一年に一回のコメの収入に頼るしかなかった稲作農家にとって，最もお金が乏しくなるお盆前に，比較的短期間に現金収入が得られる養蚕は，農家の無くてはならない副業（内職）であった。農家ではこの蚕を「おこさま」と称し，それはそれは大事に育てた。しかし，養蚕はどこの家でもやっていたものでは無かったようである。老母の話によると，蚕は育てるのに手間暇がかかるため，多くの家族労働が得られ，また飼うのに広いスペースが必要なために，広い部屋数を持っている大きな家でしかやれなかったそうである。ある意味では，限られた農家でしかやれなかった副業だったという。

我が家では，気丈な祖母を中心に，その指示の元，祖父，両親，そして三人の兄弟の計七人で養蚕の仕事をした。一番忙しい時期には，近所に嫁いでいる叔母たちも手伝いに駆けつけてきてくれた。我が家で飼っていた春蚕は，六月初めの頃，近所の中心となる農家（子場育て）に，福島県の保原町あたりから来た先生（養蚕指導員）の指導を得て，「種」といわれる卵から小さな黒い幼虫に孵化させ，それを五ミリメートルほどに育てたものを譲り受け，田植えの終わった六月下旬頃から育て始めるのであった。まずは，十二畳二間の部屋の物を全部片付け，畳も取って空き部屋にするのである。次に長い唐竹と縄で棚を組み，養蚕箱を並べることができるようにして準備をした。初めは一，二箱ぐらいから育てるのであるが，餌の桑の葉も柔らかい若葉を選び，食べやすいように桑切り包丁で刻んでから食べさせるのである。蚕の食べる様子をつぶさに観察しながら，時には室温や湿度調節もして，それはそれはきわめて慎重に，大事に大事に育てたものである。この大事な仕事は祖母の役目であった。養蚕は，子育てに通じるところがあるが，養蚕にかける祖母の並々ならぬ熱意，そしておこ（蚕）さまをいつくしむ眼差しは，孫が高熱を出し，不眠不休で看病してくれた時の祖母の姿，眼差しそのものであった。

蚕の成長はとても早い。体調が一センチメートルとなり，そして，五，六センチメートルにも成長すると，蚕は朝，昼，晩と日に三度も桑の葉を食べるようになる。シャワシャワと昼夜の別なく桑の葉を食べ尽くす様は，誠に見事であった。こうなると，餌の桑の葉取りが大変になる。家の男たちは桑畑に行って枝ごと切り取って束ね，リヤカーに満載して家に持ち帰る。帰るやいなや直径一メートルもある大きなザル三，四個に「桑こぎ」をして桑の葉を貯めておくのである。十歳にもなれば大人並みの働きが期待され，私は，子ども心に，本物の「お子さま」が部屋の隅に追いやられ，その上くたくたになるまで働かされるこの頃が嫌で嫌でたまらなかった。

あんなに桑の葉を貪り食っていた蚕も，体が透き通ってくると食べるのをピタッと止め，首をもたげて眠りに入る。すかさずワラで編んだ「まぶし」といわれるものに蚕を移し，繭をかかせるのである。二週間もすると硬く，形の整った真っ白な繭を作り上げる。

いよいよ繭を出荷する日が来た。前の日から機械を使って繭の周りについている薄汚い真綿を剥ぎ取り，純白に光る繭だけを選り分け，それを柳行李（やなぎごうり）に入れて検査所に運び入れるのである。朝早くから櫛を入れ，椿油を付けて白髪をきりりと束ね，身なりをきちっと整えた祖母が，父にリヤカーを引かせて繭を出荷するのであるが，その顔は，「今年もいい繭ができた」という自信に満ち，曲がった腰も幾分伸び加減に出かけて行った。

繭にも等級があるらしく，検査で上等と判定され，繭が高く売れたときには，帰ってくる祖母の足取りも幾分軽く，顔も思わずほころんだ。私たち孫にもいくばかりの小遣いが配られ，夜には焼き魚が一尾つき，家族皆で苦労を分かち合い，仕事締めをささやかに祝い合ったものである。

今日も，散歩道を歩いてみた。桑の大木を眺める度に，五十年以上も昔の桑運びに汗を流した子どもの頃を，そして養蚕に打ち込んでいた祖母の姿を思い出す。

（二〇〇五年　岩手県小学校長会誌　第四三号

元北上市黒沢尻東小学校長）